

明野村中村道祖神遺跡出土炭化物について

松谷暁子（東京大学総合研究資料館）

長沢宏昌（山梨県教育庁学術文化課）

1

ここに紹介する資料は、明野村中村道祖神遺跡から出土した炭化種子塊の一部である。これまでも、県内ではこのような炭化種子塊が何例か出土している。しかし、それらの資料の同定が行われ、それが公表された例となると非常に少ないのが現状である。その理由は、炭化種子塊そのものの存在がかなり偶然の結果としての産物であること、また、それが発見される場合も、よほど綿密周到な発掘をしている心算でもやはり偶然性に左右される性格のものであることなど、第一義的には発見例そのものが非常に少ないことが挙げられる。それと同時に、発見される種子塊が小さいものである場合がおおく、分析にまわす十分な量がないという担当者の判断により同定に出さないケースもある。

今回報告する資料は幸いにも量的に充分あり、担当者の理解により電子顕微鏡での分析を行うことができた資料である。県内における数少ない分析資料であり、また、中世の有用植物の一資料として、ここに報告するものである。

2

中村道祖神遺跡は県営圃場整備事業に伴う事前調査として、平成元年度に発掘調査された。縄文時代～平安時代の遺構・遺物も確認されているが、主体を成すのは中世の地下式坑で45基が確認された。地下式坑からは出土遺物が少ないが、わずかに出土した土師質土器や内耳土器などから15世紀～17世紀に位置付けられている。

今回紹介する炭化種子塊は、この内の46号土坑（地下式坑）から出土したもので、内部から出土した土師質土器によって15世紀に位置付けられる。さて、炭化種子塊は室内の壁面に極めて近い部分から床よりやや浮いた状態で出土しており、数cm程度の大きさでいくつか割れていた。今回の資料はそのうちの小破片を用いたものである。

サンプルとした炭化種子の量は、径1cmの管瓶内で高さも1cmあり、したがって量は1cc位ある。実体顕微鏡下で数えてみると、ざっと100粒くらいあった。炭化により数粒が癒着して塊となっているものもあるが、一粒ずつも多い。粒の大きさは長さが1.5～1.2mm位、幅が1.2mm位である。

実体顕微鏡下で胚の跡が観察され、イネ科の穎果と推察できる。大部分の粒で穎（イネで穀に相当する部分）が観察されるが、実体顕微鏡や走査電子顕微鏡の低倍率で観察したとき、この部分（穎）は横方向に波打って見える（写真1）。この部分を拡大すると、穎の表皮細胞を構成している長細胞の一端に乳頭突起が存在するのが認められる（写真1a）。この特徴はアワ及び

11 近縁のエノコログサの仲間に認められる特徴であり、粒の大きさと外形及び時代を考慮するとアワと考えるとよいであろう。

別の粒（写真2）を拡大して観察される長細胞では乳頭突起が明瞭ではない（写真2a）。隣接の長細胞と入り組んでいる波打った側枝はキビやヒエにも見られるが、ヒエの側枝よりは短く、また側枝を除去した長細胞の中央部が幅広いので、同じくアワと判断できる。以上の結果、46号土坑の主室壁面から出土した種子は、穎が付着した、つまり脱穀していない状態のアワと考えられる。

3

近年、山間部の遺跡の調査でも土器・石器といった人工遺物だけでなく、炭化材や骨片などの自然遺物に注意がはられるようになってきている。本県においても発掘現場での慎重な調査や、整理段階での水洗選別あるいは低湿地遺跡・谷部の調査などにより、ここ数年で飛躍的に資料が増加してきている。

自然遺物のうち、とくに縄文時代の有用植物についての研究や資料収集が進み、その中でも食用に供された植物の例が増加してきている。自然遺物は火熱を受けるか、水中など酸素の遮断された状態でなければ残らないものであり、本県の場合は台地上の遺跡の発掘例が多いこともあって炭化物として確認される。なお、最近では低湿地遺跡の調査が多く行われるようになったこともあって、未炭化の状態のものも出土例が増えている。

これらの食用植物のなかで、圧倒的に多いのがドングリ・クルミ・クリ・トチの4種類の堅果類である。これらは堅い殻の存在とその大きさから、残存状況が良好かつ発見しやすいために確認数が多くなっているのであるが、一方で、遺構覆土や土器内の土の水洗選別により、台地上の遺跡ではあっても1～2mmの微小種子類も検出されることが明らかとなっている。エゴマ・シソ・アブラナ類などの栽培種とされるものや、利用植物のオヤマボクチ・サルナシ・ニワトコ、さらには畑雑草であるエノキグサ・スベリヒユ・タデなど、これまで水洗選別を実施した花鳥山・上の平の2遺跡だけでも13種類が確認されている。また、これまでほとんど報告例のなかった球根類も花鳥山・上の平・釈迦堂・水呑場北・獅子之前的の5遺跡で確認されており、特に花鳥山では30点以上出土し、また、土器内のオコゲとしても確認されていることから、その利用が確実であることを示している。

このように、発掘段階での注意によって、微小遺物の検出は充分行うことができるのであるが、これまで述べてきた縄文時代の諸遺跡の例に比べ、食糧の柱がはっきりしている弥生時代以降については、これまでそのような努力がなされていないこともあって、本県においてはかえって資料が貧弱であると言わざるをえない。もともと弥生時代の遺跡調査例が少なかったことも事実であるが、それを除けば、古墳時代以降の集落の発掘調査例は数えきれないほど行われてきているのであり、「米」の存在を当然のことと思うあまり、それ以外の部分を追求しようとする姿勢が欠けていたことは否めないであろう。平成元年に発掘調査された八代町身洗沢遺跡は、本県で初めて水田跡が確認された低湿地遺跡であり、木製品や大小の種子類が確認され

ている。このうち、栽培植物としてはモモ・ヒョウタン仲間・イネ・オオムギ・アブラナ類・シソがある。ほとんどの資料は弥生時代に位置付けられるが、オオムギは古墳時代以降である。身洗沢遺跡では層位毎のサンプリングを徹底して行ったのであるが、少なくともここではアワは確認されていない。

4

今回は中世に位置付けられるアワが確認されたわけであるが、本県内でアワと同定された資料としては初めてのものである。前述したように、本県内では弥生時代以降の（栽培も含めた）利用植物の研究は意外なほど進展していない。当然のことながら、米や粟といった穀類以外にも多くの種類が存在したはずである。弥生時代以降は米が食物の柱となるとはいっても、たとえば奈良・平安時代は『貧窮問答歌』に見られるごとく、庶民段階では米などもってのほかであり、それ以外の食糧の確保も非常に困難な様相である。また、中世以降についても、つい最近までは米を口にすることはハレの日に限られていたわけであり、通常の食糧は米以外で賄われているわけである。このような状況からすれば、庶民の生活復元には、まさに米以外の食糧の追求が重要な意味をもつことになる。そのためにも、今後も遺跡での積極的なサンプリングや水洗選別法などによって資料を増加させていくことが重要であり、その積み重ねを行うことによって山梨県内におけるアワの利用の時期、あるいは、別の種類の栽培あるいは利用植物が確認され、庶民レベルでの生活の一端に触れることが可能となろう。

（追補）

この資料については、二年以上前のことになるが当時北巨摩郡明野村教育委員会の大森隆氏（現松戸市教育委員会）よりアワらしき炭化物が出土したことを知らされ、その一部を長沢が預かり、松谷のもとに持参した経緯がある。もちろん中村道祖神遺跡の報告書に記載すべき資料であり、そのための同定資料として松谷のもとに持参したものであるが、報告書の原稿執筆締切を確認しなかった長沢の怠慢により、この資料については未報告のまま報告書が刊行されてしまった訳である。県内で初めてのアワと確認された資料であるにもかかわらず、仲介者の怠慢でこの貴重な資料を埋もれさせたままにすることは許されるべきでなく、せめて資料報告をすべきであるとの考えから、今回の報告となったものである。報告書に記載できなかった責任はすべて長沢にあり、大森氏には深謝するものである。

中村道祖神遺跡 46 号土坑主室壁面出土炭化種子

